

がある。これらは当初、弥生時代の溝と考えていたが、第4章第3節で述べたとおり6区①・③で確認された古代の道路遺構の下部痕跡を示しているものと考えた。また、道路遺構の周辺部は今までの調査で水田域として利用されていたと推測されており、集落の中心域は弥生時代同様に南側で継続していた可能性が高い。今回の調査区では確認していないが、この後この地は、湿地化してオモカス層に覆われるようになる。中近世になると旧河道が流れる地点となり、集落域の中心部は移動した可能性もある。なぜならば旧河道中からは卒塔婆状木製品が1点出土しており、3区や6区③からも大型の卒塔婆状木製品が出土していることからみれば、当地周辺に墓地の存在や、川縁における供養行為が行われていたことも想定され、居住域と言うより祭祀的な場になっていたことも考慮されよう。

第2節 朝鮮半島系楽浪土器の様相と山持遺跡の評価

1. 朝鮮半島系楽浪土器の様相

第12層の砂礫層から朝鮮半島系楽浪土器と考えられる土器が1点出土した。ほぼ完形の壺で形態等の分かる良好な資料である。その特徴を再度述べると、①直立気味にのびる頸部から外方に屈曲する口縁部を有し、端部に小さい面をつくる。肩部に最大径をもつ。②胎土はきめ細かく、還元焰焼成で軟質の須恵器に近い。③外面はロクロ回転によるナデで仕上げ、胴部下半にヘラ削りの痕跡が認められる。④底部は平らで広く、静止糸切りの後周辺に軽いヘラ削りを施す、といった特徴があげられる。こういった特徴は朝鮮半島系の楽浪土器に認められることから、楽浪土器の可能性が高いと考えた。年代については楽浪郡の存続期間がBC108年～AD313年であること、共伴する弥生土器の年代の下限が弥生時代後期前半であることから、弥生時代中期後半～後期前半と推測され、日本列島でも古い段階のものに位置づけられる。

山陰での楽浪土器の出土例は山持遺跡と当事業予定地内遺跡である青木遺跡、松江市鹿島町沖の日本海から引き揚げられたとされる完形品の壺1点の3例が知られている。山持遺跡では今回の発見例の他に8点確認されており、いずれも6区の砂礫層からの出土である。詳細な形状を窺い知ることにはできないが、短頸壺の破片と考えられている。胎土は泥質の砂粒を含まない緻密なもので、焼成は瓦質であるが比較的良好である。外面は縄蓆文タタキの後沈線を施し、内面には同心円もしくは平行の当て具痕を残すが、ナデにより不明瞭となっている。年代については砂礫層出土であることから、弥生時代中期後半～後期前半と推測される。

青木遺跡では壺形土器の破片1点が出土している。胎土は極めて細かい粒子を基調としており、外面に縄蓆文タタキの後、横方向の沈線を引く。内面は丁寧なナデ調整を施している。古墳時代中期を中心とする包含層出土のものであることから詳細な年代については確定されていない。

鹿島町沖引き揚げ例のものは完形品の壺で、口縁部は短く外方にのび、端部は肥厚する。胴部中央に最大径をもつ。調整は風化により不明瞭であるが、外面に横方向のヘラ磨き状の痕跡が認められ、内面はナデ調整で仕上げている。底部は平底であるが、糸切り痕の有無は不明である。年代については寺井誠氏によって石巖里99号墳や養洞里3号墳などで出土した壺との類似性から後期後半以降の年代が想定されている（寺井2007）。

楽浪土器は楽浪郡で製作・使用された土器で、灰色泥質系土器・滑石混入土器・白色土器などが知られており、日本列島で出土する楽浪土器の多くは灰色泥質系土器である。器種は壺形、鉢形、

高坏形、器台、皿などがあるが、日本出土例の大半は壺形、鉢形で占められており、高坏の出土例は確認されていない。楽浪土器の出土例のほとんどは壺岐・対馬を含めた北部九州が主要地域となり、特に長崎県壺岐市原の辻遺跡では約 150 点出土していることから、当時の大陸との交易拠点と考えられている。関門海峡以東の地域では、前述した出雲市山持遺跡・青木遺跡と松江市鹿島町沖の引き揚げ例のみが知られているだけであり、現状では北部九州と島根県東部地域の山持遺跡に集中するという特異な分布状況を示している。また、完形品は北部九州においても長崎県壺岐市カラカミ遺跡出土の壺など数例しか認められず、極めて稀な事例と言え注目される。

2. 山持遺跡の評価

山持遺跡では上述した楽浪土器の他に 3 区から朝鮮系無文土器の靑島式土器 7 点も出土している。山陰での靑島式土器の出土例は当遺跡の他に出雲市矢野遺跡 1 点、鳥取市青谷上寺地遺跡 2 点が知られているだけである。いずれも山陰を代表する拠点集落であり、青谷上寺地遺跡の場合は他地域にはみられない朝鮮半島系鉄器の存在から大陸との直接的な交渉の可能性も想定され、環日本海地域交流における主要な港湾的機能を持った物流拠点集落として位置づけられている（鳥取県埋蔵文化財センター 2006）。山持遺跡には楽浪土器と靑島式土器が集中するという特異性が認められるものの、土器以外の朝鮮半島系遺物は現時点では認められない。しかし、北部九州や西部瀬戸内系の搬入系土器も多数出土していることからみれば、弥生時代後期段階には青谷上寺地遺跡同様に日本海沿岸地域有数の交易拠点的な集落であったと評価することも可能である。また、当遺跡における対朝鮮半島交渉は、直接的に行われたと見るよりも原の辻＝三雲貿易を統括する北部九州集団を介してか、またその強い影響下のもと行われたとする指摘もあり（池淵 2007）、現状ではそう理解するのが妥当であると思われる。

このように北部九州を除く地域で、朝鮮半島系の土器がこれだけ集中して出土する遺跡は他に例がないと思われ、広域な地域間交流については当遺跡の重要な要素の一つと考えられる。外来系土器等の詳細な検討や、山陰での交易的拠点集落の地域差や性格の相違について検討を進め、環日本海地域における山持遺跡の再評価や朝鮮半島交渉等におけるルートの解明が今後の検討課題と言える。

引用・参考文献等

武末純一 1991 『土器からみた日韓交渉』 学生社

寺井 誠 2007 「日本列島出土楽浪系土器についての基礎的研究」『古文化談叢』 56

池淵俊一 2007 「弥生時代後期の遺構・遺物に関する諸問題」『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区 Vol. 2』 島根県教育委員会

島根県教育委員会 2009 『山持遺跡 Vol. 5』

島根県教育委員会 2010 『山持遺跡 Vol. 6』

島根県教育委員会 2006 『青木遺跡Ⅱ』

出雲市教育委員会 1996 『山持川川岸遺跡』

出雲市教育委員会 2010 『矢野遺跡』

鳥取県埋蔵文化財センター 2006 『青谷上寺地遺跡 8』

伊都国歴史博物館 2004 『海を越えたメッセージ 伊都国歴史博物館図録 1』

島根県教育委員会 2011 『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター講演会 掘った、わかった弥生時代の出雲－遺跡が語る文化交流－』

楽浪土器の評価等については武末純一、深澤芳樹、池淵俊一氏らから多くのご教示をいただいた。